

社会学の国際化に関する研究 (3)

——国際的研究活動関与の諸類型——

山形大学 山本英弘

1 目的

本報告では、日本社会学会員調査データに基づき、日本の社会学における国際的な研究活動の実態を俯瞰的に把握することを試みる。そのために、国際的な研究活動への関与によって回答者を類型化し、諸属性（性別、研究歴、在外経験、在外研究経験、専門分野）との関連を検討する。さらに、国際的な研究活動への関与によって、国際化に対する態度がどのように異なるのかを検討する。

2 方法

2016年2～3月に行った「社会学の国際化に関する調査」で得られたデータを用いる。この調査は日本社会学会会員全員（ただし、オンライン名簿に情報がある会員）3,487名を対象とし、メールにて依頼し、ウェブ上での回答を求めた。回答数は1,037であり、回収率は29.7%である。

3 結果

国際的な研究活動として、国際学会への参加、学会報告、在外調査、海外の研究者との意見交換、国際的研究プロジェクトへの参加、海外の研究者との協同報告、国際学会への加入、国際誌への投稿、国際誌への掲載、在外教育の各項目について経験あり／なしの2値に分け、潜在クラス分析によって類型化を行った。その結果、全般に関与がみられない低関与型（40.5%）、学会参加の他では国際的研究プロジェクトへの参加が顕著にみられるプロジェクト参加型（27.6%）、学会参加の他では国際誌への投稿・掲載が顕著にみられる論文投稿型（16.5%）、全般に関与がみられる高関与型（15.4%）の4つのクラスが析出された。

国際的な研究活動への関与の類型と諸属性との関連を検討したところ、以下の諸点が明らかとなった。第1に、研究歴が長いほど高関与型が多く、低関与型が少ない。第2に、博士課程での留学経験および在外研究経験があるほど高関与型多い。第3に、専門分野については、社会階層、家族、性・世代、人口、社会学研究法を専門に挙げる人々では論文投稿型が多い。民族、地域、政治、比較社会を専門に挙げる人々ではプロジェクト型が多い。一方で、社会思想史、コミュニケーション、知識・科学を専門に挙げる人々では低関与型が多い。

上記の諸属性を統制したうえで、国際的な研究活動への関与の類型と国際化に対する態度の関連を検討したところ、低関与型では国際化の重要性の認識が低く、国際化に伴う問題点に敏感である。これに対して、高関与型では国際化による思考の多様性を支持する意見が多い。

4 結論

留学あるいは在外研究の経験によって、国際的な研究活動への関与が高まる。また、国際的な研究活動への関与が高い方が国際化に対しても肯定的である。その意味で、海外での研究機会を拡大し、国際的なネットワークを形成することで研究上の国際交流が活性化すると考えられる。しかし、現状では博士課程留学、在外研究とも経験者は少ない。

また、国際的な研究活動への関与は単に高低の次元だけでなく、研究プロジェクトに参加するタイプと国際誌への投稿・掲載を重視するタイプにも分けられる。これは専門分野とも関係している。各分野の流行しているテーマや学会での指針などが影響していると考えられる。